

日本語使役空間移動動詞における焦点と意味役割 Focus and Thematic Roles in Japanese Locative Verbs

伊東 朱美
Akemi Ito

東京外国語大学留学生日本語教育センター (非常勤講師)
itoakemi@aol.com

Abstract

The aim of this study is to analyze semantic information of Japanese locative verbs, such as OKU (put), NAGERU (throw), TSUMU (load) and MITASU (fill). Locative verbs encode the relationship between a moving object and a location. Although locative verbs all show this semantic similarity, their syntactic possibilities are different. An experiment investigated the focusing properties of semantic roles. Sentence continuation tasks were used in which subjects wrote continuations to sentence fragments containing two antecedents, each occupying a different semantic role. Twenty-four experimental sentences were constructed, each of which mentioned an object and a location. The experimental sentences contained verbs with theme, goal and instrument roles. The results of the experiment showed a preference for referring to a particular semantic role regardless of the word order. Although theme role is generally preferred, the preference for goal or instrument role was greater in some sentences. The results are discussed in terms of the semantic information. The locative alternation, that is Figure-Ground alternation is also discussed.

Keywords — locative verbs, locative alternation, thematic roles, focus, sentence continuation task

1. はじめに

人が物のある場所から別の場所へ移動させるという行為を表現するために、様々な動詞が使われる。このような動詞の中で、たとえば「満たす」という動詞の場合、同じ事象を表すのに、「グラスにワインを満たす」とも「ワインでグラスを満たす」とも言える。これは「場所格交替」の現象

であり、「図/地 (figure / ground) 交替」として知られている。つまり、対象物が目的語となり、中身に焦点が置かれる形にもなるし、到達点が目的語となり、容器に焦点が置かれる形にもなる。この場合、後者においては、到達点が完全に対象物によって満たされるか、あるいは、変化させられなければならない、それは「全体効果」と呼ばれる。この全体効果は、日本語では「満たす」「埋める」「塗る」「飾る」などには見られると考えてよいが、「刺す」や「巻く」に関しては考えにくい。

物の移動は、その物の状態を変化させるということにもつながる。変化と一言と言っても、物の形が変わる、物の量が増加あるいは減少する、物を取りまく環境・場所が変化するという場合が考えられる。この中で、対象物の量が増加するのは「累加的対象」と呼ばれる。前述の「満たす」という動詞は、その行為によって対象物が増加することを含んでおり、それが表す事象に量を与えているといえる。

このような日本語の使役空間移動動詞をいくつか取り上げ、物がある場所から別の場所へ移動されるという空間移動を表す事象としてとらえ、どの部分に焦点が置かれてそれを話題として取り上げるか、その傾向を調べる実験を行った。そして、その結果をもとに、これらの動詞が表す意味内容について、どのような類似点や相違点があるかを考察している。

実験は、被験者に対して与えられた第1文に続く第2文を自由に作文してもらおうという文継続課題 (sentence continuation task) を用いた。第2文の文頭に、第1文に含まれる二つの物のどちらかを入れて、自然なつながりになるように話を作ってもらおうのである。

実験で提示した文は4種類である。「(人)が(場所)に(物)を動詞」の型か、「(人)が(物)で(場所)を動詞」の型で表される動詞について、それぞれ一般的な語順の文と語順を入れ替えた文を作成した。つまり、同じ動詞について2種類の語順の文を提示したわけである。「満たす」については、両方の型がとれるので、語順を入れ替えた文も含めて4種類の文を提示している。これらの文において、対象物・到達点(場所)・容器・道具を示すと考えられる名詞句のどこに焦点が置かれてそれを話題として取り上げるのか、その傾向を調べたのである。

2. 使役空間移動動詞の分類

日本語の使役空間移動動詞には、移動の方向性を含んだ動詞が数多く存在する。たとえば「上げる」「下げる」「落とす」「降ろす」「入れる」「出す」などである。一方向だけでなく、「集める」「広める」「回す」「逃がす」のように複数の移動方向が予想できる動詞もある。これらの動詞は、「打ち上げる」「投げ入れる」「拾い集める」のように、複合動詞の後項となることができ、前項で使役の手段などが表せる。「置く」は、方向性を明白に表してはいないが、ある場所の上面に移動させるので、移動の方向性を含んだ動詞と考えられる。

使役の手段を含んだ使役移動動詞も多く存在する。「投げる」「蹴る」「打つ」「送る」など開始時使役を表すものと「運ぶ」「押す」「引く」「届ける」などの継続使役を表すものがある。

また、数少ないが、移動の様態を含んだ使役移動動詞も存在している。「流す」「浮かべる」「飛ばす」「転がす」などがあるが、移動を表す自動詞「走る」「泳ぐ」「滑る」の使役形あるいは-asuを付けた「走らす」「泳がす」「滑らす」なども同じ種類の表現だと考えてよいだろう。

そして、移動に伴う変化を含む動詞として、「積む」「注ぐ」「貼る」「詰める」「付ける」「取る」「離す」などが挙げられる。前述の「場所格交替」の現象が見られる動詞もこの種類に入る。日本語では、「花をテーブルに飾る」のように対象物を

目的語とすることが一般的であるが、「テーブルを花で飾る」のように到達点の場所を目的語とすることもできる。対象物が目的語の場合、花は一本でもよいが、場所を目的語とすると、複数本の花をテーブル全体に飾る必要があるように感じる。ただし、どちらの文でも「たくさんの花」あるいは「一本の花」と規定することはできる。

以上のように、日本語の使役空間移動動詞は、動詞の意味内容に含まれるものによって4つの種類に分けることができる。しかし、移動に伴う変化はある程度どの種類の動詞にも意味内容として含まれているであろうし、また、たとえば「詰める」を移動に伴う変化を含む動詞として分類しているが、中に物を入れる動作であるから移動の方向性を含んだ動詞とも言えるわけである。

さらに、今回の実験で取り上げた「包む」「覆う」「塞ぐ」「囲う」という動詞は、移動によって、対象物をとりまく環境が変化すると考えられる。これらの動詞は、道具格をとり、「風呂敷でスイカを包む」のように普通使われるが、「包む」の場合、「風呂敷に」とも言える。また、「覆う」は、「場所格交替」が可能ではないかと思われるが、文の容認性には個人差があるかもしれない。

3. 実験

3.1 方法

手順: 文継続課題 (sentence continuation task)
——被験者は、与えられた第1文に続く第2文を自由に作文する。その際、第2文の文頭にある「その_____は」の下線部分に、第1文に含まれる物のどちらかを入れて、自然なつながりになるように話を作る。

被験者: 日本語を母語とする男女60名 (Aグループ27名, Bグループ33名)

実験文: Aグループ, Bグループについてそれぞれ異なる12文を用紙に提示

実験で提示した文は4種類である。「-が-に-を動詞」の型と「-が-に-を動詞」の型で表される文について、それぞれ一般的な語順の

文と語順を入れ替えた文を作成した。提示した文の例をいくつか示す。(1)と(4)については、その作文例もその下に示す。文中の(人物名)のところには、「花子」や「太郎」など人の名前が入れている。

- (1) a. (人物名)はカップにコーヒーを注いだ。
その_____は…
b. (人物名)はコーヒーをカップに注いだ。
その_____は…

作文例：①そのカップは、ひびが入っていて中身がこぼれてきた。②そのコーヒーは、とてもおいしかった。

- (2) a. (人物名)はトラックに荷物を積んだ。
その_____は…
b. (人物名)は荷物をトラックに積んだ。
その_____は…

- (3) a. (人物名)は木で家を囲った。
その_____は…
b. (人物名)は家を木で囲った。
その_____は…

- (4) a. (人物名)はブロックで入り口をふさいだ。その_____は…
b. (人物名)は入り口をブロックでふさいだ。その_____は…

作文例：①そのブロックは、地震で崩壊した。②その入り口は、誰も入れなくなった。

実験でとりあげた動詞は、物体を容器や場所へ移動させることを叙述する。このような動詞の中には、「注ぐ」「置く」「積む」のように「-が-に-を 動詞」の型をとるものと、「囲う」「覆う」「塞ぐ」のように「-が-で-を 動詞」の型をとるものがある。

また、「満たす」「塗る」のように両方の型がとれる動詞もある。実験では「満たす」について、次の(5)と(6)のように「-が-に-を満たす」

と「-が-で-を満たす」の2種類の表現を提示した。それぞれ語順を入れ替えた文も提示している。

- (5) (人物名)はタンクにガスを満たした。
その_____は…
(6) (人物名)はガスでタンクを満たした。
その_____は…

(5)と(6)は、異なった表現であるが、類似の行為を表している。「タンク」は両者とも「ガス」を満たす先の容器であり、「到達点の容器」という役割を担っている。(5)は、対象物が目的語となっている「中身焦点」の表現であり、(6)は、到達点が目的語となっている「容器焦点」の表現である。

3.2 結果

まず、各動詞の実測度数をグラフに表す。図1が「-が-に-を 動詞」型、図2が「-が-で-を 動詞」型のものである。「語順①」は、一般的な語順であり、「語順②」は、語順を入れ替えたものである。例えば、図1の語順①は、「-が-に-を 動詞」の順であり、語順②は、「-が-を-に 動詞」の順で、「に」をとる名詞句と「を」をとる名詞句の順番を入れ替えて示したものである。それぞれ選択された名詞句の格ごとの集計が示してある。

「に」をとる動詞のうち、語順に関係なく、類似の実測度数を示すものの傾向をまとめると、1. 投げる・落とす・置く 2. 注ぐ・満たす 3. 積む という3グループに分けることができる。1のグループは、かなり多くの人々が「を」を助詞としてとる名詞の方を選んだというものである。2グループも、「を」をとる名詞の方を選んだ人が多かったのだが、「に」で示される名詞も割合多くの人に選ばれていたというものである。3は、「に」をとる名詞を選んだ人が多かった動詞である。

一般的な語順と入れ替えた語順の両方について、

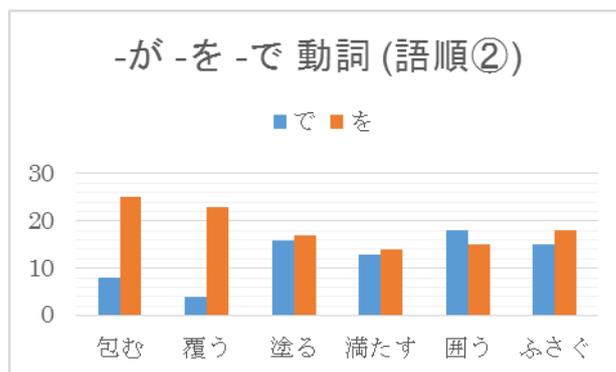
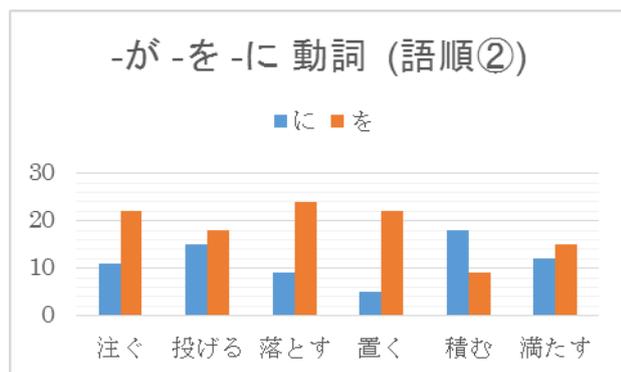
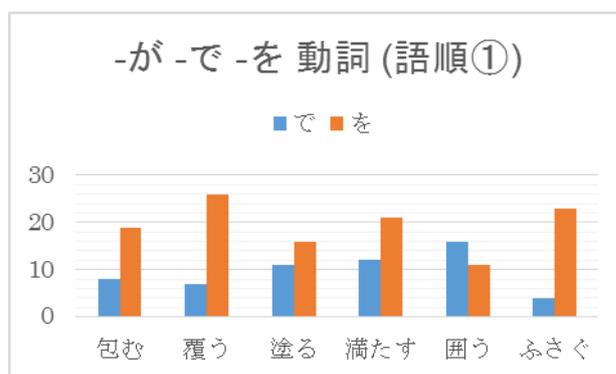
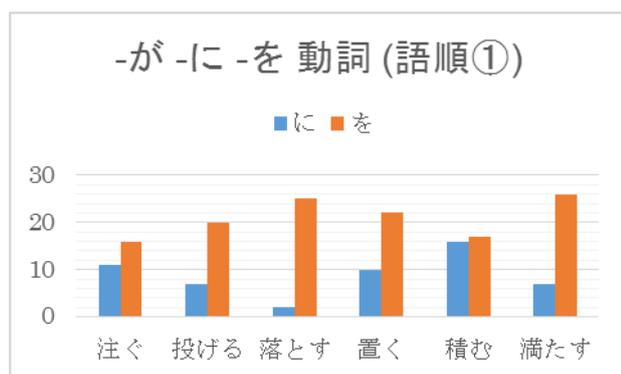


図1 「(人)が -に -を 動詞」型の
選択された名詞句の違い

図2 「(人)が -で -を 動詞」型の
選択された名詞句の違い

選択される名詞句の格が「に」か「を」ということが動詞の違いに影響するかどうか、それぞれの値について分散分析した。6つの動詞全部については、有意である ($F(3, 20)=8.57697$, $p < 0.01$) という結果であった。つまり、実測度数から、全体的には「を」の名詞句が選択されやすい傾向があるといえる。

しかし、2と3のグループの3つの動詞のみに限定すると、有意ではない ($F(3, 8)=1.383023$) という結果になった。これらの動詞に関しては、「を」と「に」のどちらかが選択されやすいということとは言えない。

「で」をとる動詞はどうだろうか。これについても、実測度数が類似している動詞をまとめると、1. 包む・覆う 2. 塗る・満たす・ふさぐ 3. 囲う という3グループに分けられる。1のグループは、「を」をとる名詞を選んだ人が多く、2のグループは、「を」と「で」がほぼ同じ、3のグループは、「で」をとる名詞を選んだ人の方が多い。

選択される名詞句の格が「で」か「を」ということは、動詞の違いに影響するかどうか、分散分析すると、6つの動詞全部に関しては、有意である ($F(3, 20)=5.776515$, $p < 0.01$) という結果であった。つまり、実測度数から、全体的には「を」の名詞句が選択されやすい傾向があるといえる。しかし、2と3のグループの3つの動詞のみに限定すると、有意ではない ($F(3, 12)=2.330623$) という結果になった。これらの動詞に関しては、「を」と「で」のどちらかが選択されやすいということとは言えない。

3.3 考察

実験で扱った動詞について、選択されやすい名詞句の傾向によって、グループ分けをしてみると、各グループの動詞が表す意味内容が類似していることがわかる。「(人)が -に -を動詞」型では、3つのグループに分類できる。第1のグループの動詞は、対象物の空間的な場所への移動が関わっている。第2のグループは、空間的な場所というよりも、容器中への移動を表し、対象物は、固体で

表 1: 使役空間移動動詞の実験結果による分析

| 動詞 | 多く選択された名詞句 | 意味内容など |
|---|--------------------------|---|
| 「-に-を」の型 投げる・落とす・置く 注ぐ・満たす 積む | 「-を」 「-を」「-に」 「-に」 | 空間的な場所への一回きりの移動 容器中への移動, 累加的対象(液体・気体) 複数回の移動, 累加的対象(固体) |
| 「-で-を」の型 包む・覆う 塗る・満たす・ふさぐ 囲う | 「-を」 「-を」「-で」 「-で」 | 対象物を全体的に包み込む 対象物を徐々に満たす 道具に焦点, 「-に-を」の型がとれない |

はなく, 液体または気体である. 第3のグループは, 移動先の場所が空間的場所とも容器中とも考えられる.

また, グループ2と3は, 移動される対象物が増加(あるいは減少)する「累加的対象」である.

累加的対象とは, Dowty (1991) によると, たとえば(7)や(8)の直接目的語で示されるものを言う.

(7) 太郎が円を描いた

(8) 花子がリンゴを食べた

これらの文では, 動詞で表される行為によって, 目的語の「対象」の量に変化し, それが事象に量を与えている.

実験の結果からは, 「対象」に焦点が置かれる傾向はあるが, それが「累加的対象」の場合, その「対象」の移動先である「到達点」のほうに焦点が移る傾向があると考えられる.

「で」をとる動詞の場合も, 「に」の動詞と同じように, グループ毎に, 意味内容が似通っていることがわかる. 1のグループは, 対象物を全体的に包み込むということを表す動詞である. 2のグループは, 対象物を徐々に満たしていくことを叙述する動詞である. 3は, 道具に焦点が置かれていると考えられる.

グループに分類したものをまとめると表1のよ

うになる. 多く選択された名詞句とそのグループの動詞が示す意味内容を示す.

「満たす」に関しては, 「に」をとる動詞としても, 「で」をとる動詞としても扱ったが, 「で」をとる動詞としてのみ調べた「塗る」も, (9)のように「に」をとることもできる. その場合, 対象として「を」をとる名詞は, 入れ替わることになる.

(9) a. 太郎は犬小屋にペンキを塗った

b. 太郎はペンキで犬小屋を塗った

この他に, 「覆う」は, 「ラップでケーキを覆う」と言うのが普通だが, 「ケーキにラップを覆う」とも言える. ただし, この容認性には個人差があるかもしれない. このように「満たす」「塗る」「覆う」は, 格助詞として「で」をとる場合と「に」をとる場合があり, 「場所格交替」が可能である.

このような日本語の場所格交替現象に類似のものとして, 英語の spray, load という動詞の「図/地 (figure / ground) 交替」として知られる現象がある. (10), (11) に例を示す.

(10) a. Ken sprayed water onto the flower.

b. Ken sprayed the flower with water.

(11) a. Ken loaded hay into the wagon.

b. Ken loaded the wagon with hay.

(10a), (11a) のように, 前置詞 into, onto をとって述べられる形は, 対象物が目的語となり, 中身に焦点が置かれるという形である. 一方, (10b), (11b) のように, with をとる形は, 到達点が目的語となり, 容器に焦点が置かれたものである. このような動詞は, 「場所格交替」が許されるのである. この場合, 到達点が目的語の形である (10b), (11b) において, 到達点が完全に対象 (物) によって満たされるか, あるいは, 変化させられなければならない. もし, そうでない場合は, 場所格交替は不可能になる. これは「全体効果」と呼ばれる. 日本語の「満たす」「塗る」「埋める」など場所格交替が可能な動詞に関しても, 到達点が目的語の形では, 到達点が完全に対象によって満たされていると考えられる. ただし, 英語には, 「満たす」タイプの動詞だけでなく, empty, drain など「除く」タイプの動詞にも場所格交替の現象が見られるが, 日本語にはそのようなことはない.

4. まとめ

実験の結果から, 全体的に「対象」の役割をもつヲ格名詞句に焦点が置かれる傾向があるが, 段階的に「対象」から「到達点」あるいは「道具」へ焦点が移っているということがわかった. 焦点が置かれるところが類似している動詞は, 意味内容も似通っていることが明らかになったといえる.

日本語の使役空間移動動詞には, 「一が一に一を 動詞」の型と「一が一で一を 動詞」型があるが, どちらの型もとれる動詞もある. その場合, 対象がヲ格で示され, 二格で到達点が示された動詞は, その二格がヲ格となって中身よりも容器のほうに焦点が置かれ, ヲ格の対象物はデ格で表されることになる.

これらの動詞について, 対象物・到達点・容器・道具を示すと考えられる名詞句のどこに焦点が置かれ, それを話題として取り上げるか, その傾向を調べたのであるが, 全体的にはヲ格名詞句に焦点が置かれる傾向があることが明らかになった.

しかし, ヲ格名詞句は, 「物の中身」を表しているばかりではない. ヲ格で物が入られる「容器」あるいは「到達点」を表す場合もある. また, 動詞が表す意味内容によっては, ヲ格ではない二格またはデ格をとる名詞句に焦点が移動することも明らかになっている.

このようなことを考えると, これらの使役空間移動動詞は, 「一が一に一を 動詞」型と「一が一で一を 動詞」型があるというような形の上での分類だけでなく, 動詞の意味内容を考慮に入れた捉え方がよいのではないと思われる.

また, 空間移動を表す動詞は, 異なった「意味場」でも使用されるという. たとえば, 同じ「移す」という動詞によって, 物の所有や物の性質など空間移動以外の意味も表すことができる. 「スマホを鞆の中から机の上に移した」や「住まいを大阪から東京に移した」と言えば, 空間的な移動だが, 「経営権を A 社から B 社に移した」と言うと, 所有の移動である. また, 「別のの人に心に移す」や「計画を実行に移す」など性質や状態が変化したことを言うことができるし, スケジュールが変わったということを示す「出発の時間を 8 時から 9 時に移した」と言うこともできる. これらは話題として取り上げられた「対象」の「意味場」が異なると言われるが, どれも, 対象があるところから別のところへ移動するということを叙述している.

このような「意味場」の違いも含めて, 移動の動詞について, その意味内容を中心に分析し, 全体像を捉えていく必要があるだろう.

参考文献

- [1] Bowerman, M and S. Choi (2001) Shaping meanings for language: universal and language-specific in the acquisition of spatial semantic categories. In Bowerman-Levinson (eds.). 475-511.
- [2] Bowerman, M and S. C. Levinson (2001) Language Acquisition and Conceptual Development. Cambridge University Press.

- [3] Dowty, D. (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language*, 67, 547-619.
- [4] 伊東朱美 (1998) 言語の理解と産出—日本語の照応表現を中心に— 大阪大学大学院言語文化研究科博士論文.
- [5] 伊東朱美 (1998) 意味役割と照応. 大阪大学言語文化学 vol. 7, 205-215.
- [6] 伊東朱美 (2007) 日本語の使役空間移動動詞に関する認知心理分析. 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 第33号, 121-128.
- [7] Jackendoff, R. (1976) Toward an explanatory semantic representation. *Linguistic Inquiry* 7, 89-150.
- [8] Jackendoff, R. (1983) *Semantics and cognition*. MIT Press.
- [9] 大津由紀雄 (1995) 『認知心理学 3 言語』 東京大学出版会
- [10] Stevenson, R. J., R. A. Crawley and D. Kleinman (1994) Thematic roles, focus and representation of events. *Language and Cognitive Processes* 9, 519-548.
- [11] Talmy, L. (1985) Lexicalization pattern: semantic structure in lexical forms. In Schopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description*, vol. 3, 57-149. Cambridge University Press.
- [12] 田中茂範・松本曜 (1997) 『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』 研究社出版